様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 17 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007～2008
課題番号：19820059
研究課題名（和文）　日本列島先史社会の生業形態再考－民族誌調査による植物考古学研究の基盤形成に向けて
研究課題名（英文）　An ethnoarchaeological approach to prehistoric subsistence systems in Japanese archipelago: Forming new concept for archaeobotanical research

研究代表者
細谷　葵（HOSOYA AOI）
総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員
研究者番号：40455233

研究成果の概要：
当研究は、昨今見直しが求められている日本先史社会の生業観について、植物考古学の視点からの再考に役立てるべく、生きた社会の農耕社会データを組織的に収集すべく実施された。パプアニューギニア、バリ島、奄美大島にて、とくに農耕作業と貯蔵施設のあり方に焦点を当てた民族調査を行い、これまでよく認識されていなかった稲作作業の実態やさまざまな貯蔵の形などについて、今後の先史生業研究の発展のために有用なデータを得ることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,320,000	0	1,320,000
2008 年度	1,350,000	405,000	1,755,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,670,000	405,000	3,075,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：考古学
キーワード：生業、先史時代、栽培形態、貯蔵形態、民族調査、伝統的農耕

１．研究開始当初の背景

1990 年代から 2000 年代にかけての考古学の動きのなかで、縄文から弥生へという日本の先史社会の変遷の様相について、特に生業基盤の面から見直しが求められていた。狩猟・採集に基盤をおく縄文社会がアジア大陸からの水田稲作の導入によって急速に弥生稲作社会へと変貌したという従来の考え方が、新しい考古学研究の成果に照らして、成り立たなくなってきたためである。第一に、主に植物遺存体の研究によって、縄文社会にも焼畑稲作などが存在した可能性が提唱された。第二に、炭素 14 年代法による新しい年代観から、「弥生社会化」にはこれまで考えられていたより 500 年近く長い時間がかかったことが議論された。すなわち、人間は農耕を知ればすぐに農耕社会を形成するという段階論的な考え方ではなく、狩猟・採集も植物栽培も生業戦略のひとつの型とみなし、そのさまざまな形態や変化の要因について実証的に考察していくことが、縄文－弥生の変遷やその後の社会変化を真に理解するために要求されていたのである。

研究代表者（細谷）は、かねてよりこの問題に興味をもち、人間と植物の関係に焦点をあてた実証的な先史研究のもっとも効果的

な方法として、英国ケンブリッジ大学にて植物考古学を学んだ。植物考古学では、人間が利用した植物の遺存体を直接に分析できるだけではなく、その空間的・量的考察から、特定の植物への人間の依存度のちがいや、社会全体としてどのくらい組織的に植物利用をしていたかまでも議論できるからである。そして、研究代表者の博士論文(2002 年)では、その方法論・視点を生かした日本先史社会研究として、弥生社会における階級制の確立には、コメの脱穀・貯蔵という生業にかかわる日常活動を管理することで集落リーダーの権力が拡大したという背景があったことを論じた。

この研究で対象とした脱穀など生業にかかわる日常活動のあり方、および貯蔵形態の問題は、植物遺存体や遺構の形で痕跡が残る可能性が高く、植物考古学の方法で現実的にアプローチできるテーマである。しかし、研究の過程において、実際にさまざまな生業活動がどのような植物遺存体を残しうるのか、また生業形態による貯蔵形態のちがいについて、生きた社会からの情報の必要を強く感じた。こうした情報は、機械を使わない伝統的な農耕作業等を行う社会での民族誌調査から得ることができる。そのような視点からの民族誌調査は、欧米ではムギ栽培地を中心に 1980 年代から行われてきており、日本でも縄文時代の主要食糧と考えられている木の実については 1970 年代から行われてきたが、縄文－弥生の変遷に重要な意味をもつコメや、水田農耕との関係性が問われる焼畑農耕については、ほとんど行われていなかった。

そこで研究代表者は、その基盤データの不足を解決し、日本における植物考古学からの先史研究の見直しを充実したものにしていくために、2002 年度以降民族誌調査を開始した。対象は焼畑農耕を営み、伝統的なイモ貯蔵施設（ヤムハウス）を残すパプアニューギニア、高床式倉庫への貯蔵をはじめ伝統的なコメ栽培作業を実施しているバリ島、やはり高床式倉庫の伝統を残す奄美大島である。しかし、2006 年度までは自ら研究費を申請する資格を持たなかったため、既存の研究グループに加わって行う形の調査となり、その調査内容設定や調査地の選択において、上記の目的を果たすのに必ずしも最適な状況とは言えなかった。そこで、2007 年度より科学研究費補助金の申請資格を得たことを機に、当研究を申請し、実施するに至った。

２．研究の目的

研究目的の第一は、日本列島先史社会の植物考古学研究に直接生かせるデータ収集においた。そのひとつは、日本先史社会の生業として重要な意味をもつ稲作において、脱穀などの各種作業を、機械を使わない状態でどのような手順で行うのかの情報収集と、その各段階で出る廃棄物のパターン分析である。このデータは、植物考古学研究において、植物遺存体の残存パターン分析に参照し、稲作にかかわる各種作業がどのように行われたのかの復元に役立てることができる。こうした復元は、生業と社会組織の関係を考察する基本としてきわめて重要である。しかし、欧米のムギ農耕についてはこうしたデータがすでに多く集められているのにひきかえ、稲作については限られたデータしか存在しないため、自ら収集する必要があった。もうひとつは、さまざまな貯蔵施設と、生業におけるその意義や、象徴性なども含む社会的な意味についての情報を収集することである。貯蔵施設は遺構として残り、また食糧獲得戦略を反映するものとして、考古学的生業研究のうえで重要な要素である。しかし、遺構の研究だけでは、貯蔵がその社会でどのくらい日常的な重要性をもっていたか、解釈の手がかりに欠ける。また、貯蔵施設の所有が権力の所有につながる、儀礼的な力につながるなど、その機能以外に付加される社会的意味についても多くの議論がなされてきた。こうした側面については、しばしば生きた社会の事例が引かれるが、組織的に収集・分析された情報は少なく、やはりそうした視点での情報収集が要された。

研究目的の第二は、考古学的に生業と社会を復元するにあたっての全体的なコンセプトの提供をめざして、さまざまな形の伝統的農耕と生活のあり方について理解を深めることである。とりわけ、「農耕以前」と「農耕以後」で社会の姿もおのづから変わるという段階論的な生業史観の見直しにつながるような、「農耕社会の多様さ」を示す事例の収集が必要であった。そのために、複数の生きた社会での民族調査において、上記の農耕作業のデータや貯蔵施設のデータに焦点を置きつつ、それらを含む包括的な生業戦略の姿をつかんでいくことを目指した。

３．研究の方法

上記の、大きくふたつの研究目的を達するべく、複数の異なる性質の伝統的農耕社会において民族調査を行った。調査地は、研究代表者がすでに調査経験があり、基盤が作られている、パプアニューギニア、バリ島、奄美大島に定めた。

第一の目的のひとつめである、機械を使わない稲作作業の手順と廃棄物に関するデータ収集については、稲作社会であるバリ島で行った。現在のバリ島の稲作作業については一部機械化も導入されているが、機械化以前の作業を実体験している人々がまだ多く存在するので、その作業を再現してもらうなどして、一連の作業を観察した。さらに作業各

段階の廃棄物を収集し、内容のパターン分析を行った。見られる作業は時期によって異なるため、時期をさまざまに変えた複数回の調査を実施、また作業の手順などについて個々の事例で異なりうる部分と普遍的な部分を見分けるべく、調査地域、インフォマントを替えてなるべく多くの事例を集めた。

第一の目的のふたつめである、貯蔵施設に関するデータ収集については、主に焼畑ポリカルチャーのパプアニューギニアと、稲作モノカルチャーのバリ島について、貯蔵されるもの、その生業における意義、象徴性などについて聞き取り調査を行った。また、貯蔵作業、貯蔵施設の儀礼などの観察、さらに貯蔵施設の配置パターンの調査・分析を行い、主観面と客観面の両方からの各々の社会における貯蔵施設の意味の考察を目指した。

奄美大島については、貯蔵施設(高倉)を使用する伝統的農業じたいは既に過去のものとなっているので、貯蔵の機能を失っても現存する高倉がある理由、すなわち貯蔵施設の「機能以外に付加される社会的意味」の考察を目的として調査を実施することにした。方法としてはやはり客観面と主観面の双方からの考察を目指し、集落ごとに現存高倉をカウントおよび分布パターンを分析していく悉皆調査と、聞き取り調査をあわせて行った。

第二の目的である、さまざまな伝統的農耕と生業戦略に関する総合的な理解については、すべての調査地において、一日の活動の同行観察、聞き取り調査、文献調査などの方法をあわせて実施した。それによって、各社会の生業の姿についての包括的な情報収集、理解を目指した。

４．研究成果

2007～2008 年度の研究期間を通じて、1 回のパプアニューギニア調査（および 1 回のオーストラリアにおける資料収集）、2 回のバリ島調査、3 回の奄美大島調査を実施するとともに、研究に必要な書籍、器材などを購入した。その結果、以下の成果が得られた。

第一の目的のひとつめであった、機械を使わない稲作作業のデータ収集については、バリ島で現在栽培されている二種類のコメである「ローカル・ライス」と「ノーマル・ライス」について、異なるパターンの作業手順、廃棄物のデータを得ることができた。稲作についての過去のこのようなデータには、事例数が少ないこともあり、複数のパターンを比較検討できるようなものは存在しなかった。すなわち、当研究で得られたデータは今までにない研究の前進につながるものと考えられる。この成果については、『*東南アジア考古学*』(2007 年)、海老澤編 (2008 年)に論文として発表した。

第一の目的のふたつめであった、貯蔵施設に関するデータ収集については、バリ島とパプアニューギニアで、明確に異なる貯蔵施設の意義を認識することができた。すなわち、モノカルチャーでコメのみを主食とするバリ島では、貯蔵施設は日常食を恒常的に保管する役割をもち、中身のコメは長期計画に基づいて貯蔵・消費されるとともに、生活の中での貯蔵食糧とのかかわりは定期的なものとなる。一方、ポリカルチャーで多様な根栽類を主食とするパプアニューギニアでは、貯蔵施設は生活そのものに不可欠な存在ではない。ヤムイモを貯蔵するヤムハウスは、基本的に種イモの保管と、冠婚葬祭の際に使用する特別食を保管しておく目的のものである。したがって日常生活の中での貯蔵施設とのかかわりは不定期なものとなる。さらにこうした貯蔵の性質のちがいは、バリ島のコメ倉は必ず屋敷地の中に作られ、定期的な儀礼も行われるが、パプアニューギニアのヤムハウスは畑の近くに建てることが好まれるという、位置パターンや社会的意味のちがいにも反映していることがわかった。

さらに同じバリ島内においても、「ローカル・ライス」と「ノーマル・ライス」では異なる貯蔵施設が使用されるというパターンがあることを発見した。そこから、伝統的なコメである「ローカル・ライス」については、貯蔵施設も各種道具も伝統的なものが使用されるが、1960 年代に新しく導入された「ノーマル・ライス」については貯蔵施設も道具もすべて新しいものが使用されているという、作物の種類と物質文化との一貫したつながりの存在を見出すことができた。従来の考古学研究では、貯蔵施設の存在を一様に長期的計画に基づく生業形態と結び付けがちで、このように多様で複雑な作物、生業形態と貯蔵施設の関係が論じられることは少なかった。したがって、当研究で得られたこれらの成果は、生業と社会の関係を復元するに当たり、これまでとは異なる幅広い視点を提供できるものと思われる。これらの成果については、日本考古学協会大会(2008 年)などでの口頭発表や、A. Popov 編(2008 年)、海老澤編(2008 年)、菊池徹夫先生古希記念事業事務局編(2010 年予定)などの論文として発表した。

奄美大島については、現存の高倉の数を確認し、その分布地図を作成する作業を、主だった 12 の集落について完成できた。こうした高倉の現存状況調査は、1980 年代、1990 年代に行政によって行われているものの、過去 10 年以上行われておらず、地域にとっても有用な資料になると考える。概報を J. Uchiyama ほか編(2009 年)に発表したが、今後さらに完全な報告を発表していく所存である。また、高倉は現在、奄美大島の「文化的景観」の一部としても認識されており、赤木名地区文化的景観専門委員会との合同ミー

ティングでの口頭発表(2009 年)を皮切りに、当研究から発展させて、地域の文化事業にも将来的に貢献していける見込みが立っている。

第二の目的であった、さまざまな伝統的農耕と生活のあり方の理解については、とくにパプアニューギニアでの調査で、農耕社会であるが漁労、狩猟、採集なども同等に行う、多様な資源利用に基づいた生業戦略の姿をつかむことができた。従来、農耕の開始はそのまま社会構造の大きな変革につながるという生業史観が一般的だった。しかし、昨今の植物考古学の成果から、農耕起源地である西アジア(ムギ)、中国(コメ)のいずれでも、実際には農耕が始まってもそれが生業のごく一部であった時期が非常に長く、漁労、採集なども生業の重要な要素であり続けたことが指摘され、これまでの初期農耕社会観が塗り替えられつつある。当研究において、実際に農耕活動が生業のごく一部である社会の様相を実見し、資料としてまとめられたことは、今後の初期農耕社会研究のために非常に有用なコンセプトの提供につながると考えられる。

また、奄美大島における聞き取り調査から、日本でも地域によっては、パプアニューギニアと同様の複合的な資源利用が戦後期頃まで実施されていたことがうかがえた。日本文化イコール稲作文化ではないということは以前より議論されているが、上記のように世界的に農耕社会観の見直しがうながされている現在の背景において、改めてこの問題を再考することには大きな意義があると考えられる。当研究で得られた資料は、その側面においても今後の研究の発展に大いにつながるものである。

「多様な資源利用に基づく農耕社会」に関する研究成果は、木村編(2009 年)の論文で発表予定であるが、今後さらに、考古学研究と組み合わせた論考を、積極的に発表していく所存である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①細谷　葵、貯蔵施設が意味するもの―バリ島とヤバム島（パプアニューギニア）の比較民族考古学調査、菊池徹夫先生古希記念事業事務局（編）*比較考古学の地平*、同成社、掲載頁未定、2010 年、査読無

②細谷　葵、焼畑の生業サイクルと根栽類の貯蔵システムーパプアニューギニアの事例にみる「農耕文化」の多様性、木村栄美（編）*ユーラシア農耕史：さまざまな栽培植物と農耕文化*、臨川書店、掲載頁未定、2009 年、査読無

③細谷　葵、「伝統」の景観－奄美大島・高倉の現存分布調査－、J. Uchiyama, K. Lindstrom, C. Zeballos & O. Nakamura (eds.) *Neomap Interim Report 2008- Neolithisation and Modernisation: Landscape History on East Asian Inland Seas*, Research Institute for Humanity and Nature, 171-184 頁、2009 年、査読無

④細谷　葵、貯蔵形態と生業サイクルーバリ島稲作とパプアニューギニア焼畑作の民族誌調査からー、日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会（編）*日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集*、309-324 頁、2008 年、査読無

⑤細谷　葵、コメと倉―バリ島稲作社会の民族考古学調査、海老澤衷（編）*講座　水稲文化研究Ⅳ　バリ島の水稲文化と儀礼*、早稲田大学水稲文化研究所、87-111 頁、2008 年、査読無

⑥Leo Aoi Hosoya, Storage Facilities and the Agricultural ‘Routine-scape’ in Japanese Prehistory- Archaeological and ethnographic approaches, A. Popov (ed.) *Neolithic and Neolithisation in the Japanese Sea Basin-Individual and the historical landscape*, Влаливостok, 236-246 頁，2008 年，査読無

⑦高橋龍三郎、細谷葵、井出浩正、根岸洋、中門亮太、パプア・ニューギニアにおける民族考古学的調査(4)、*史観* 158、74-99 頁、2008 年、査読無

⑧細谷　葵、“社会植物考古学”の視点によるバリ島稲作の民族誌調査、*東南アジア考古学* 27、19-38 頁、2007 年、査読有

〔学会発表〕（計１０件）

①細谷　葵、高倉のある景観：それが象徴するもの、赤木名地区文化的景観専門委員会・地球研NEOMAP琉球グループ合同ミーティング、2009 年 6 月 6 日、奄美大島

②Leo Aoi Hosoya, Surrounded by Water, but Short of it: Ethnohistory of agriculture in Okinawa Islands, IHDP Open Meeting 2009, 2009 年 4 月 28 日、ボン（ドイツ）

③Leo Aoi Hosoya, Wild Food for Farmers: Archaeobotanical and ethnoarchaeological reconstruction of wild resource exploitation by Chinese early farmers, Society for American Archaeology 74th Annual Meeting, 2009 年 4 月 25 日、アトランタ（アメリカ）

④細谷　葵、“過程”の聖化－奄美大島の稲作作業と祭り、地球研NEOMAP2008 年度第 6 回景観セミナ、2009 年 1 月 30 日、京都

⑤細谷　葵、貯蔵形態と生業サイクル- バリ島稲作とパプアニューギニア焼畑作の民族誌調査から、日本考古学協会 2008 年度大会、2008 年 11 月 8 日、名古屋

⑥細谷　葵、南島の生業と景観－なぜトロブリアンドのチーフには22人の妻がいるのか、地球研NEOMAP2008年度第4回景観セミナ、2008年9月26日、京都
⑦Leo Aoi Hosoya, Storing food, for what?: Ethnoarchaeology of storage and agricultural cycles in Bali, Indonesia and Yabam Island, PNG, The 6th World Archaeology Congress, 2008年6月30日、ダブリン（アイルランド）
⑧ Leo Aoi Hosoya, Plant food subsistence strategy and the 'routine-scape' in Japanese and Chinese prehistory, The 4th Worldwide Conference of the Society for East Asian Archaeology, 2008年6月3日、北京（中国）
⑨Leo Aoi Hosoya, Staple Foods during the Prehistoric Periods of Japan: Archaeological and Ethnographic Approaches, UC Berkeley Public Symposium "The Ancient Jomon and the Pacific Rim", 2008年3月22日、バークレー（アメリカ）
⑩Leo Aoi Hosoya, Storage facilities and the agricultural 'routine-scape' in Japanese prehistory- Archaeological and ethnographic approaches, International Archaeological Conference "Neolithic and Neolithisation in the Japanese Sea Basin", 2008年3月17日、ウラジオストック（ロシア）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
細谷　葵（HOSOYA AOI）
総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員
研究者番号：40455233